



第56回全国中学校バドミントン大会
男子ダブルス 第3位

中学最後の夏 挑んだ全国の舞台

「全国の舞台で入賞という結果を残せたことに、大きな喜びと達成感を感じています」と笑顔を見せる佐藤さん。8月23日に鳥取県米子市で開催された「第56回全国中学校バドミントン大会」男子ダブルスで、全国3位に輝いた。

佐藤さんは、4人の兄の影響で6歳からバドミントンを始めた。1学年下の後輩と組んだ今大会。思うように勝てない時期もあったが、日々の練習で工夫を重ね、少しずつ連携を深めてきた。迎えた全国の舞台。独特の緊張感が漂う中、「自分たちの力を出し切り絶対に上位入賞する」という強い気持ちでコートに立った。試合中2人で声をかけ合い、粘り強くシャトルを追い続け、見事表彰台に上がった。中学校生活の最後に素晴らしい成果を収めた佐藤さんは、「高校でも1年生から活躍できるように、まずはしっかり体づくりに取り組み、一日一日の練習を大切に頑張りたい」と、さらなる高みへと羽ばたく。

佐藤 葵貴 聖ウルスラ学院英智中
3年 / 迫町江合



第104回全日本ローイング選手権大会
軽量級男子ダブルスカル 優勝

学生生活の集大成 たどり着いた頂点

Saijo Hayate

西條 翔風

東海大4年 / 津山町横山7区出身

全国や世界の舞台で活躍した
学生たちの挑戦に迫る

Zoom Up

Tome 2026 Special



左から、伊藤 未来 中田中3年 / 中田町蓬原
齋藤 かのん 新田中2年 / 迫町菱の倉

「目標の全国優勝には届かなかったけど、仲間と野球ができたことに価値があります」と笑顔で語る2人。これからも、いつも笑い合える「常笑軍団」は、全国の頂点を目指して突き進む。

第24回全日本女子軟式野球大会
中学生の部 ベスト8
第11回全日本中学女子軟式野球大会 ベスト8

オレゴン2026 U20世界陸上競技
選手権大会 400mハードル 準決勝進出



千葉 遼 法政大1年 / 南方町北大畑出身

「自分が理想とするレースができず悔しさもありますが、世界の舞台を経験できたことは大きな財産になりました」と前を向く千葉さん。世界を相手に堂々と戦い抜いた。今回の経験を今後の競技生活に生かし、さらなる飛躍を目指す。

「できることは全てやり尽くしたので、正直優勝以外は考えていませんでしたが、決まった瞬間はやっぱりうれしさが一番にこみ上げてきました」と白い歯を見せる。

第104回全日本ローイング選手権大会が6月4から7日まで、海の森水上競技場(東京都江東区)で開催され、津山町出身の西條さんが軽量級男子ダブルスカルで優勝を果たした。

ボートとの出会いは高校生の時。小、中学校と、別の競技に打ち込んできたが、進学した佐沼高校の部活動紹介で「初心者でも日本一になれる」という言葉に引かれ、これまで身近ではなかった頂点を本気で目指したいと思った。高校3年生の時に全国高等学校選抜ボート大会への出場を果たし、「ベストを尽くせば全国でも通用する」という手応えを感じた。高校で引退するつもりだったが、「まだやり切れていない」という思いから、大学でも競技を継続することを決意。東海大学に進学し、日本一になるという強い決意を胸に、少数精鋭ながら長い歴史を持つ名門ボート部の門をたたいた。

大学1、2年生の頃はシングルスカルを中心に好成績を残すも、メダルには一步届かなかった。3

年生となり、同級生とペアを結成して軽量級男子ダブルスカルで全国準優勝を獲得。喜びと同時に、あと一步で優勝を逃した悔しさから翌年のリベンジを誓った。基礎から徹底的に鍛え直し、2人の動きを合わせることや持久力を高めることを意識しながら、ストイックに練習と体づくりに打ち込んだ。迎えた本番、予選では序盤から首位を譲らず、トップで通過。決勝では、中盤でライバルに並ばれるも、焦らず自分たちのペースを貫き、最後は一気に差を広げ、栄冠をつかみ取った。西條さんは当時を振り返り、「自分以上に監督やコーチ、大学関係者、家族のみんなが喜んでくれたのが何よりもうれしかったです」と笑みを浮かべる。大学としても38年ぶりの金メダル。学生生活の集大成として日本一を達成し、これまで支えてくれた周囲の人たちへ、最高の形で恩返しを果たすことができた。

これまでのけがの影響もあり、大学卒業を機に現役を引退する。「今後のことはまだ決まっていませんが、指導者などの形でボートに関わり続け、日本のボート界に貢献できたらうれしいです」と次世代の育成に意欲を見せる。まっすぐに未来を見据え、次のステージへと歩みを進める。